

夕霧阿波鳴渡

近松門左衛門作

地年の内に春は來にけり一白に。餅花開く

餅つきのにぎくはしや九軒町。嘉例の日

取吉田屋の。フシ庭の籠は難波津の。地歌の

心よ蒸籠の湯氣の大杵。昇夫の長兵衛が大

汗で。やあるい。中居の萬が白取のさつ。

やあるい。さつやあるいさつ。地さつさつ

けく。ハツア木遣で搦きやれな。先づ恵

方棚神の棚鏡とるく。遣手衆の顔に取粉

の面白いとて妓衆の笑ひ。禿が手折る柳の

枝の。春も近づく。年も近づく。やがて

廊も。フシ谷の戸も。ハルヲシ出でて初昔の。

鶯の。地羽づくろひの君もあり。正月買

の。大々壺。太夫様より附扇。門を

賣る聲山草や。ちよつと祝ひましょ裏白

様。ごまめで御座んせの春永に。いよし

もかはらぬ御見まで。逢潮を契る餅は杵。

ついで離れぬお客を祝ひ。白へ入れます。

ますく全盛。座敷は善哉。庭には節

季候こりや又目出度い。揚屋の餅つき。

紋日の長持お客に大鼓持。これや又にぎ

く女郎衆にやり持。お家は金持大々福

福。松吹くふくく松風や松うる。聲こ

そ三重戀風の。フシ其の扇屋の。金山と。

名は立ち上る夕霧や秋の末よりぶらく

と。寝たり起りたり面瘦せて。スエ薬も日

敷ふる雪の。重らぬ先の養生と。勤めも心

まなれど。深き好みの吉田屋は。足許輕

き道中や。暖簾くゆるも力なく今日は目

出度うござんす。ア、しんどうやと腰打ち

かけ。我が身を横に投入の。フシ水仙清き姿

なり。地喜左衛門機嫌よくこれはく太夫

様。御氣色もよいかして聞いた程瘦せもな

されす。お顔持もずんどよい先づ今日は嘉

例の餅つき。格子へお出なされてより去年

の今日迄。伊左衛門様とお二人一度もお外

れなされぬに。今年の餅搗ばつかり伊左衛

門様は流浪遊ばす。お前は御病氣嘉例を外

す所。此の喜左衛門頭痛八百。ちよつとな

りとも呼びまし度いと願ふ折柄。御今日の

お客は四國のお侍。頭巾で頭は見えねども

角前髪のお小姓らしい。地その器量のよさ

おほこさ。道頓堀の若衆方女方ひつさらへ

てもけもない事。四國西國隠れない夕霧と

いふ太夫に。近付になり度いとてわざく

大阪で御越年。お氣合に構ふとて初対面は

お勤めなされぬも存じながら。呼びに進せ

た流石お馴染の喜左衛門。舌應なしのお出

身祝と申しどつというた餅つき。何かも

尻餅ついて悦びます。これ杉沖之丞。中の

間へいで善哉祝や。地こは冷えます太夫

様。先づ御座敷へと言ひければ。地ア、

私が氣色も良いが良いにはた、ねども。伊

左衛門様と二人づれ
 一度も缺かさぬ今日
 の日なれば。命の内
 に一寸来て伊左衛門
 様に逢ふ心。此方様
 達の顔見度いと思ふ
 折ふし呼びに來たを
 幸に。爰迄は來まし
 た座敷は氣儘に勤め
 る。さう思うて下ん
 せ何が採お氣任せ。
 どうなりともまろくまろりりに
 やらしやんせとオクリ
 座敷へへこそは出し
 けれへフシ冬編笠も。
 垢かたばりて。紙衣の火
 打膝の皿。風吹き渡
 ぐ忍ぶ草フシ忍ぶと
 すれど古の。花は風
 の。願ねがひに。今日の



寒さを喰ひしやる。
 食出し鏝はもかみさび
 て鏝は詰りし師走の
 果は。胡散からしく吉田
 屋の内を覗いて。喜
 左衛門宿にか。ちよ
 つと逢はう。喜左衛
 門地く〜とフッ鼻に。
 扇の横柄なり。地男
 ども口々にヤア彼奴か
 は何者ぢや。風の神
 か鳥威あしの様なさま
 でなんぢや喜左衛門
 に逢はう。百貫目も
 使ふ大盡のいふ様
 な。棒まかれなと言
 ひければ、チ、百貫
 目がそれ程貴い物で
 もない。喜左衛門と
 いふべき者でいふ程



に逢はせてくれい。地どりや逢はせてくれう。こんな目に逢せてくれうと。竹箒持つてかゝるを喜左衛門飛下り。強請者か知らぬ粗相すな。誰方でござると笠を覗いて。ヤア伊左衛門様か。何と喜左。是は夢か七つか。地扱お久しや懐しや。京大佛の馬町に御通塞と承り。霧様よりは數通の御狀。飛脚も二三度奈良大津迄尋ねさせ。たつた今もお噂先づお馴染の小座敷で。二年積るお物語いざお通りと袖引けば。調ア、紙衣觸が荒い。これ引けば破れる摺めば跡にしはす坊主師走浪人。昔は這が迎ひに出る今はやうく。長刀の草履を脱いで編笠のフシ中の座敷に通りが。地お茶からうと喜左衛門。縮緬に紅絹裏の小袖をふはと打ちかくる。調ア、是はいはれぬ。寒晒の伊左衛門少しも苦しからねども。志を着致すと。地戴いて着る有様喜左衛門つくく見て。エ、浮世ぢや藤屋の伊左衛門様に。此の吉田屋の

喜左衛門が着せます小袖。假令蜀江の錦でも戴いて召しませうか。眞に涙がこぼれますと目をするを見て否これ喜左。此の紙衣の仕合さらく。無念と存せぬ。總じて重たい俵物材木でも牛馬が負ふは珍しからぬ。犬か猫が負うたらば是はと人が手を打たう。我等も其の通り紙衣の拾一枚で。七百貫目の借銭貸うて。ぎくともせぬは恐らく藤屋の伊左衛門。日本に一人の男。此の身が金ぢやそれで冷えて堪らぬ。地ヤアウ此の身が金とは忝い。喜左衛門が餅搗に大きな金がお入りなされた。これ噂まだ蓬萊は飾らねども。先づ正月の心三寶飾つて持つておじやとて入りければ。内儀はあつと襟に穗長折り敷く橙柑子。蜜柑や何や櫻搗栗おゆかしや。久しぶりて御無事なお顔お嬉し様やと出でければ。伊左衛門とかうの挨拶涙ぐみ。夫婦の衆が慇懃蓬萊と迄氣がつけども。夕とも霧とも言ひ出さぬ。ほのかに聞けば夕霧が事が氣病にたれども。命危しと聞及びしが。いかう重いか但し無常の夕霧と。消失せて了うたか。地歎きをかけまいと言出さぬか。誓文で泣くまい語つて聞かしや。泣かぬくといふ聲も。フシ氣遣ひ涙に濁りけり。いやく是はお道理。霧様の御氣色秋の頃はさんざんお道理。霧様のお引きなされしが寒に入つて少し御快氣。地則ち阿波のお侍正月もなさるる筈で。今日はにと言ひも果てぬに伊左衛門。調ヤアくそれは眞實か。地はて嘘か誠か隣座敷。覗いて御覽なされませ。伊左衛門はつと急いたる顔色にて。スエチ暫し詞もなかりしが。調なう内儀。天地開け始めて。誠ある傾城と迦陵頻の雄鳥は楯にかいたも見た者ない。地總嫁の様な領域めに微塵も心は残らねども。調知つての通り彼奴が腹から出た身が悴。しかも男子で明ければ七つ。元の遣手玉が才覚で里に遣つた

してかな棄てつらん。阿波の侍といふは合

點此の前我と張合つた。阿波の大盡平とい

ふ者。情思へば傾城買より紙屑買がましぢ

や。金出して此方へ取る物は狀文ばつか

り。七百貫目が紙屑では富士の山の張抜も

樂な事。仕合の悪い時は何で損をせうも知

らぬ。無用の涙で紙衣の袖濡した。繼目が

睡れぬ先に罷歸ると立たんとす。ア、餘り

御短氣奥のお客は平儀では御座りませぬ。

いやく平でも盡でも此方仕度ようござる

と地立上るそれはお前の慳食と申すもの。

先つ夕霧様に逢はせましょ。いやとても慳

貪なら。夕霧より蕎麥切に致さうと。拗ね

まはる其の中に奥座敷より手を叩く。あ

れ禿業はどこにぞと。地言ひつゝ出づる内

儀につれて樓の陰より差覗けば。二人馴れ

にし床柱、フッ凭れかゝるも形見ぞと。地忘

れもやらぬ物ごしは儘に彼の人がなしほ

に座を立つて。逢ひたや見たやと心もせき

そむけて向ふ客の顔。さも大名の小姓だち

風よしの衣裳つき。ばつばの鉸箱象眼鐸若

紫の炮烙頭巾。懐中より香包名木火鉢に薰

らせ。嗚是へ來やれ。身ななどが様な奉公

人は。殿の御前に相詰め。たまさか遊興所

へ參るも氣晴しといふ内に。第一は夕霧殿

に戀ある故。君の機嫌のよい様にお身を頼

む。一つ飲みやれ有せんと。地ひらり紙花

七九寸木枕に打敷いて。横になるとの阿波

大盡夕霧が襦袢に。兩足ぐつと入れければ

扱もなめたりく。此の夕霧に足もたす

はこりやちつと慮外さうな。それ程足が苦

にならば打折つて棄てたがよいと。地言ひ

捨ててつと立ち次へ出づれば伊左衛門。

ちやつと寝ころぶ肱枕。空寝。入りし

て高軒。地はつとばかりに夕霧我が身を共

に襦袢に。引纏ひ寄せとんと寝てヌエ抱付

き締寄せ泣きけるが。なう伊左衛門様く

目を覺して下んせ。私や煩うて疾うに死ぬ

る苦なれど。今日迄命存らへたはま一度逢

はせて下さる。神佛の控へ綱これ懐しう

はないかいの。顔が見たうは無いかいの目

を明いて下んせと。揺起しく抱起せばむ

つくと起き。横さまに取つて投げ。これ

夕霧殿とやら夕めし殿とやら。節季師走こ

なたの様に隙ではない。七百貫目の借錢負

うて夜盡稼ぐ伊左衛門。此の様な時疑ねば

ならぬ。地邪魔なされな總嫁殿と。ころり

と臥して又ごうくと空解。ム、ウ身に覺

えはなけれども恨があらば聞きませう。寢

させはせぬと引起す。此れ何とする。此

の體でも藤屋の伊左衛門。今の如く奥座敷

の侍に。踏まれたり蹴られたりする女郎に

近付は持たぬ。地こゝな萬歳傾城。萬歳な

らば春おじゃッ通りやくと言ひけれ

ば。地ム、ウ此の夕霧を萬歳とは。ヲウ萬

歳傾城の因縁知らずか。侍の足にかけて蹴

らるゝを。萬歳傾城といふぞや。地誠に目

出度候ひける。しかも足駄履いて蹴るや阿

ら。年立ち歸るあしだにて。誠に目出度

う候ひける。聞えたかさり乍ら何も身す

ぎ。あの様なよい衆
 には蹴られても損は
 いかぬ。欲を知らね
 ば身が立たぬ。よく
 若に御萬歳や年立ち
 かへるあしだにて。
 誠に目出度う候ひけ
 る地町人もける伊左
 衛門もける。ける
 くけると蹴散か
 し。調是喜左餅でも
 米でもやつてやりや
 と。地煙草引寄せ吹
 く煙管のラシさらぬ。
 體にて居たりけり。
 地夕霧わつと咽せ返
 りエ、こな様とも覺
 えぬ。此の夕霧をま
 だ傾城と思つてか。
 本の女夫ぢやないか



いの。明ければ私も廿二十五の暮から逢ひかゝり。何年になる事ぞ。儲けた子さへまちつとで早七つ。誠をいは、今頃は一門中の状文にも。伊左衛門内よりと書いても人の咎めぬ事。私に恨みがあるならばこな様ンにも恨みがある。去年の暮から丸一年二年越しに音づれなく。それは幾瀬の物案じそれ故に此の病。瘦せ衰へが目に見えぬか。地煎薬と練薬と鍼と按摩で漸うと。命繋いでたまさかに逢う



てこなさに甘ようと。思ふ所を逆様なこり
や懐かしいどうぞいの。私が心變つたら踏
んでばかり置かんすか叩いてばかり置かん
すか。是死にかゝつて居る夕霧ぢや。笑ひ
顔見せて下んせ拜んます。エ、心強い胸
欲な憎やと膝に引寄せて。叩いつ擦つつ聲
をあげフツ涙。亂れて髪ほどけわけも。性
根もなかりけり。地伊左衛門も涙にくれ
テ、過つた外にさして恨はなけれども。命
に代へぬ大事の女房奥座敷の若い者。我
が物面がむつとして思はぬ腹立堪へたも。
地我とても憂き身の體誠の正體見給へと。
小袖くろりと脱ぎければ肌に袷の破れ紙
衣。四十八枚彌陀の願。つぎは平等施一
切。フシ胸顛ふこそ哀なれ。伊左衛門涙を
抑へ。圖扱かの悴は無事で里に居る事か。
なんとしたぞと言ひければ。されば其の子
を里に遣りしと申せしは偽り。まゝならぬ
お身の上苦勞にさせます氣の毒さ。地彼の
阿波の大壺平岡左近といふ人と。私とが仲

の子と言ひかけて塗りつけて見たれば。人
人は愚かなままと誑され受取つて。腹は
借り物武士の胤と寵愛にあふと聞くにつ
け。地身の憂き時は色々の怖い智恵も出る
もつと。語りもあへぬに伊左衛門ム、ウさ
もあらう事。圖さり乍ら我が古への手代ど
も。其の子をつき立て母へ訴訟し。藤屋の
家を取立てたいとの談合あり。地どうぞ譯
をいうて取返す。思案がしたいといふ所
に。奥より内儀色違へなうおとましましや
く。お二人爰の話が奥の座敷へ筒抜け。
お客様が不興顔直に逢うて言ふ事ありと。
今こゝへお出なう喜左衛門殿ごちの人と。
皆々怖がりひそめく所へ客は刀を掲げ。地
ア、これ伊左衛門殿夕霧殿。驚く事は少し
もない。地これ其の證據と頭巾を取れば突
出し鬘の下笄。龜甲挿櫛さしもの粹ども
呆れて不審晴れやらず。圖テ、如何にも不
審のたつ筈。男に化けたる其の間は何のそ
のと思ひしが。女子の姿を願して此の中で
もの申すはおはもじ乍ら。彼の阿波の大壺
平岡左近が本妻雪と申すは我が身の事。夕
霧殿の假の情連合の子を誕生とて。此方へ
請取り言は、我が悦ぶ子。腹も痛まず苦
勞せず産んでもらひし忝さ。あだにもせず
守り育て。手習讀み物弓槍までも器用に
て。地國隣りの土佐駒乗かせ乗つた姿は。
天晴平岡左近が世嗣。七百石の主なりと御
家中の褒め者さぞ見たからうし見せし。
一つは彼の子が冥加のため夕霧殿を請出
し。一所に伴ひ。フシ暮さんと。心根も聞
かんだため鐵漿落しつあられぬ様で。只今
聞けば我が連合を誑して。地伊左衛門の子
を突き付けたと聞くよりはつと胸塞がり。
夫の武士は廢つたエ、恨めしい夕霧。男に
化けたを幸ひ飛びかゝつて刺通し。我も死
なうと刀を取りは取つたれども。地死んだ
跡で此の雪が傾城に愜氣して。阿房死と言
はれてはいよく、男の名を出すと。止るも
殿御を思ふ故。無い事さへいふ世のさがな

さ。阿波の平岡左近こそ。町人の子を傾城

に突き付けられたと取沙汰し。殿様のお耳

に立てば好い仕合で御改易。地阿房拂か切

腹か死しても悪名消えばこそ。此の所を

料簡しあの子を其の儘下されば。侍一人の

取立生々世々のお情ぞや。我人我が子は

大事のもの殊に思ふ人の子を。思はぬ人の

子といふは何しに心よからうぞ。それは流

れの身の辛さ。侍の妻には又此の様な憂き

事あり。阿女子と生れし此の因果女御更衣

になるとても。羨しうは思はぬと。地心の

底を口説き立て。涙わりなき物語。夕霧夫

婦吉田屋のフシ家袖を濡しける。阿伊左

衛門つとと出でハ、ア賢女かな貞女かな。

左近殿とは夕霧ゆゑ遺恨はあれどもそれ

は私。拙者も彼の悴を力に。出世の望ござ

れども。武家のまゝには換へられず。進ず

るといふ迄もなし。以前夕霧が申す通り。

左近殿の御子息伊左衛門が子ではござら

ぬ。ア、忝い夕霧殿もさうぢやぞや。はて

主の合點の上からは私が否とは申されぬ。

地さりながら命の内。ちよつと見せて下さ

んせとステテ涙に咽ぶぞ道理なる。地ヲ、心

得た。萬事胸に込めました身請の事も

吉田屋と。近々に談合しませうあの子が成

人するにつけ。伊左衛門殿も樂みサア契約

の固めの盃。いよゝあの子はこつちの子

平岡左近が總領。さなりと手を打つて

フシ廓でさゝんざ珍しし。地日も暮れかゝれ

ば若黨中間驚縮つらせ。阿波の旦那のお

迎ひ。地これ下人も忍ぶ此の姿。元の男と

なりふり作り。頭巾大小印縮巾着亭主さら

ば。阿夕霧ことは追付けはより便宜せう。

萬事頼む地受込みましたと。膝を屈める

腰屈める。腰元連れるを引替へて。昇去が

送る大門や。口をきこより奥様の深き。情

や三重へ立歸る。

中之巻

フシ春や延寶。六年と明渡る世も昔の京。

難波の今朝は珍しき妻子引具し舊冬より。

上本町の道場の立關構へ借座敷。お國の御

用あら玉のフシに年とるまめ男。地阿

波の國平岡左近と宿札も。門の飾に時めき

てフシ武家は綺羅ある春なれや。地表の物

見に女中の聲々申し奥様。珍しい大阪の正

月を。始めて見物致しお國へ歸つてよい話。

是もお陰と悦ぶにぞ。阿ヲ、そら達が

言ふ通り。主のお陰は忝い。御用について

左近殿我々連れて僅か逗留の旅宿へ今朝か

ら禮者の絶えぬ事。地皆殿様の御威光。左

近殿は源之介連れて。地天満とやらの神明

様へ惠方参り。地親の子としてほらしい六

つや七つで馬に乗る。追付け左近殿の名代

御奉公勤めるを。見るであらうと御悅の所

へ。旦那のお歸り前供走る黒羽織。すつ

く素槍栗毛の馬。のつし鬘斗目に麻上下

親に續いて源之介。明けて七つの乳吞まう

饅頭形の中刺も。目許賢きうなる松千代を

嘶ゆる土佐駒に。手綱かいくくりしやんく

く。響の音ははりりんく。りんと据り

し袴腰ハシ物見の前を乗廻せば。これ
源之介戻りやつたか目出たいと
ぞ馬上が寒からうおとなしい出来しやつた
と。招かれて源之介申し母様。御恵方参に
天満へ寄つて。是買つて来ました。土
人形の天神手綱に持添へ。私が是持つて居
るのを道通りが見付けて。父様を見知つて
居るやら。親は太夫買ひ子は天神買ふと言
うて笑ひました。地俺にも大きな太夫買
て下されと。あどなき詞に腰元ども氣の毒
がり。これしいくと目ませすれば源之
介。サイ駄賃馬のやうにしいくとは不
調法な。侍の乗馬はこれ此の様にはい
く。地はいくと親の心も白泡かま
せ。門内へ乗入れし振りたいけにおと
なし。地今の詞に腰元衆口を閉ぢて奥様
の機嫌を窺ふ體なれば。これ源の
話を聞いたか。道通りが左近殿を太夫買ひ
と言うたげな。此の前大阪お屋敷役の時。
新町通ひに夕霧といふ太夫に馴染をかけ。

源之介を儲けたは定めて皆も聞きつらん。
人の見知るも道理大名高家も母方の吟味は
なし。大事なとは言ひながら。地あの子
が心は此の雪を生みの母と思つてゐる。必
すく夕霧が子といふ噂禁制ぞや。其の夕
霧をも請出しあの子がお乳に置く筈。傍輩
並にあしらやと仰せも果てぬに腰元中口々
に。ア、奥様の餘り結構すぎました。我
我がなんほ沙汰を致さずとも。あの傾城の
ばしやれ者それを言はずにるませうか。地
お袋ぶつて鼻高うお家を有り度いまにし
て。奥様を踏み付けるは今の事く。地
だそればかりか下地かにやこい旦那様。小
舌たるうしかけたらほつかりと喰付いて。
田もやらう畦もやらうで。奥様はうつそり
地鼻あいてしまはんしよ。小無益しいあた
分の悪い。こりや御無用に遊ばせと焚付け
らるゝ女心。ア、いへばさうぢや俺は甚
い阿房ぢや。祈りも退けたい戀の敵持つて
率てあてがふは。盗人に藏の番磁石に針。

地皆に氣をつけられてはやもやくと腹が
立つ。後に悔みの出るは定請出す事を止め
にやらう。皆出かいたよういつてくれた。
地扱はいよく止めになされますか。はて
止めにせいで何とせう。ア、氣がさつぱり
となりました。おりん殿好い氣味か。私や
瘡が下りました。おしゆん殿は何と。こち
や銀拾うたより嬉しいと。地身に徳もなき
法界悟氣フシ是ぞ女の習ひなる。地あれ北か
ら十文字の道具。お藏屋敷の小栗軍兵衛
様年頭の御禮。御一門の中でも彼方は堅い
そりやくと。物見の簾下す間にはや立關
に物まう。地どれい小栗軍兵衛御慶申す。
地旦那幸ひ宿に在りいさお通りと言ひけれ
ば。軍兵衛立關に立つてこれ家来ども。地
御用について左近殿と申し合する事あり。
暫く隙が入るべきぞ。屋敷へ歸つて八つ
時分迎ひに来い。ない。其の中ちと早く來
いない。地油断するなと入りければ。地若
黨始め草履取狭箱フシ皆々宿所へ歸りしが。

地道具持の樋右衛門。一人残つて臺所覗き。

り人の氣に入り雇はれて。眞性者と言はれ

る。これ此處の御奉公は中途に參つて馴染

誰ぞ頼みませう。飯炊の竹呼び出して下

た故片町のふりを内へ呼び入れ。師走にひ

はなし。お國迄も御内衆が悪名立てるが悲

されと。いふ所へ馬取の角介苦い顔して。

ろめがあつたぞや。是でこそ女房の肩も

しい。此の上張の袷を脱ぐ。角介殿これ

や樋右衛門汝や見事武家に奉公するかや

怒るわいの。此方と言交して明けて四年。

で濟して下されと。帯を解かんとする所

い。此の角介が僅かな切米の内五百五十

給分一文身につけず皆此方に入れあける。

へお腰元のりん走り出で。これく竹。其

といふ錢を取替へた。冬年一言の斷も

それを何ぢやよい年して。長屋へ比丘尼

其方の心底奥様物見よりお聞きなされ。扱

せず。今も先づ身に逢ひ度いといふべ

引入れ日が暮れると濱せせり。まだ其の上

扱奇特な。上々迄も女たる身の儘と殊なう

所。竹を呼び出しくれとはの太い者だ。

に稻荷あたりの裏屋小路を覗き廻り。擧句

お感じなさる。奥様にもちとお氣のすま

錢の濟む迄是を取ると槍の柄に縋り付く。

に此の頃は夜見世狂ひも付いたけな。私と

ぬ事あれども。其方を手本にお心が納つ

待て角介槍持が槍を取られては。樋右衛門

ても木竹ぢやなし悟氣もし度い腹も立つ。

てお嬉しさ。師匠とも思召し御褒美に。此

が首がない。五百や六百で賣る首ぢやない

エ、憎いとは思へども。ア、さうぢやな

の鳥目百疋下さる。扱角介は慮外な。

ならぬ。ヤア取つて見せうと。地諍合ふ最

い。女子に生れた因果ぢや。男のさがを

餘所の大事のお道具に手をかける狼藉千

中。竹走出でヲウ角介殿道理ぢや。錢は竹

顯すまいと随分私が身をつめ。三度つ

萬。重ねて此の事言ひ出さば旦那様へ仰せ

が濟す堪忍して下され。エ、情なの性悪男

ける油も一度つけ。雪踏履くを草履にし草

られ。打首になさる。との御意ぢやといへ

めや。世間を見て恥を知りやお小人町の久

履はくを跣足でしまひ。鍋釜の墨掻くにも

ば。頭かく介佛頂面。竹は悦びア、冥加

六は。こなたより若い人八軒屋の龜とた

此方の髭に入ると思ひ。能い所をのけて置

もない有難い。兎角お禮はよい様にと頂き

つた一年懇して。小錢ためて宿持つて。冬

く我が身の事には元結一筋買はぬは。男を

く。これ樋右衛門殿これ持つて往なつ

年も鶴が橋のおば、へ。大きな鏡に小鮎添

大事にかけける故ぢやないかいの。女房には

しやれ。何を見込み此の様に可愛いぞ

へて据ゑられた。藤の棚の捻兵衛は此方

苦勞をさせ榮耀が除つて色狂ひ。聞えぬ人

と。譬への裸疋疋を。直に男に槍持に過ぎ

夕霧が。地思ひも寄らぬ此の春の。子の口を根から根引の松にホオケリかゝる。藤屋の伊左衛門我が子の顔の見まほしく。習はぬ駕籠の片端かたはなを隠れて忍ぶ頬被り。夕霧もオダテ越子こを見る今日の嬉しさより。夫に別る、

物うさは、フシ上本町にぞ着きにける。編宿

札を見て喜左衛門。誰方たぞ女中方頼みませう。ハウどれからぞと腰元出つれば。私は

九軒町吉田屋喜左衛門と申す者奥様よりお頼みなされし扇屋夕霧身請の事。随分と

廻廻り金子は當月一ばいに。お渡しなさる約束でゐいやおうと首尾なり。只今はへ

同道。地扱々節季の忙しい中私の働き。春の用意正月のお客の詮索。錢金ぜにの諸拂押詰

めての節分。大豆大豆で打出す鬼の首、フシ取つた様にぞ申しける。地成程奥様にも其のお

噂。扱はあれが傾城かたが殿かと駕籠を覗いて。地ハウアウ傾城かたがといふもの始めて見たやつ

ばり常の女子ぢやと。走り入つて奥様々々。地傾城かたがが参りました。ヤア森やししい皆物見から

聞いてゐた。傾城かたが々々と言ふまいぞ。今よりは源之介のお乳の人。侍町人の歴々につ

きあうて。心も至り目恥かしい。地粗相して笑はれな盃の用意せよと。ひそめく聲に

左近勝手へ入りければ。地これなう豫て申せし夕霧の事。吉田屋の喜左衛門が埒明け

連立ち来たとの案内。地なんと此の雪がやうな格氣せぬ。氣の通つた女房は御座んす

まいかと笑はるれば。ヲ、御奇特くさり乍ら。座敷に堅い軍兵衛が居らるゝ今内へ

は呼ばれまい。表に置いても自に立つ。どうかかうかと思案半ば。門前には喜左衛門

ア、甚いう冷い。夕霧様は御病氣後早う内へ入れまし。火になりとも當てましたい。地

頼みませうくと地呼ばはる聲若黨中間ばらばらと。小栗軍兵衛迎の者と。奴の聲揚

屋の聲。遣手はなくて傾城に、フシ槍侍しやうじ交り地喧やし。稍日もたけて軍兵衛お暇申すと

よ。追付け殿の御用に立ちめされう。随分弓馬の稽古精出し申さうぞ。地永日ながひ々々と

オトリ殿へごひして歸りけり。地左近親子立關に立休らひて見送る體。伊左衛門遙かに

見て。あれは我が子が昔の伊左衛門ならば、人の子になさうか大小こそ指させずとも。

數多の手代若い者若旦那とかしづかせ。京大阪の町人の誰にかは劣るべき。侍とても

負けまじき母親の駕籠を父親が昇き。我が子の門に這こひ躡つふ我親に背きたる。其の

耐たひつしと思ひ知り。悔み涙に頬被りのシ手拭てぬぐい。浸ひすばかりなり。地奥方も端近く。

事なき風情それを力に夕霧は。駕籠これへと他ももれ出でて平様お久しうござんす。奥様

のお慈悲にてあのお子のお乳母に。附けらるゝ善ながらのらぞんざいの私が身。氣色

もしかしかはかどらねど先づ若子わかし様を見たさにと。つくぐと打守り。地あれ喜左衛門様扱も氣高いよいお子や。聞及びしより

おとなし様常體つねたての者の子が。七つや八つで
かうあらうか。地人は筋目が恥しい流石父
様のお子程ある。父様のお心がさこそと推
量せらるゝと。表の方へ目を配れば伊左
衛門も首のばし。魂ぬけてみどり子のッ
袖に。飛び入るばかりなり。地左近夫婦
は氣もつかずサア喜左衛門。調先づ少しな
りとも金子渡さういざ座敷へ。これ源之介。
あの人はわが身の乳母馴染ちかひをかけていとし
がり。此の母も同然に。大人になつても乳
母は見捨てぬものぢやぞや。地吉田屋こち
へとにこやかにオチリ打連れへ座敷へ入りに
けり。地夕霧四邊よっぺんを見廻しなうなつかしや
さつきにから。抱き付きたうてならなんだ
と。縋り付いて泣きければ伊左衛門も走り
入り。思はず知らずやれ可愛の者やと。だ
き付く所を源之介飛退き。調やい駕籠昇め。
穢けがいなりで侍にだき付く慮外者めと。脇差
に手をかくるア、く申し眞平々々御免な
りませ。私が俥に丁度お前程ながござれど

も。少い時から人手に渡し。見度いくと
存する折節。地お前を見付けどうも堪こたへら
れず。心亂れて慮外の段御免遊ばし。あこ
ぎな申し事なれど。お侍のお慈悲に。父か
というて私にだき付いて下されませと。額
を疊にすり付けて。フッ手を合せてぞ泣きぬ
たる。地何の汝を父ちちといはうおりや父様
に言うて来うと。駈け入る所を夕霧だき止
めこれ申し。乳母が始めての御訴訟頼み上
ぐるど泣きければ。調乳母の言やる事なら
いうてやらう。父様なうとだき付くを。地チ
ヲ忝いと、ちやくと嬉し泣き。夕霧も羨
しく序に私わたくしも母ははというて下されかし。調チ
ヲいうてやらう是は母様。地チ、わしが子
ぢや是は父様おれが子ぢや。二人が中の思
ひ子の親子夫婦の寄合は。又今生では叶は
ぬと泣いつ笑うつ様々に。フッ寵愛。こそは
道理なれ。奥より左近が聲として。藤屋伊
左衛門。くと呼ぶ聲す南無三寶と逸出づ
れば。續いて左近走り出で袖を控へて。調

これ古へ夢會せし。阿波の大盡と異名を呼
ばれし平岡左近。其方に恨はなけれども
夕霧に言ふ事あり。それにて聴聞致されよ
とがばと突退け涙を淨め。エ、偽多き遊女
の習ひ驚くべきにあらねども。是程遠よう
もく、此の左近を積りしな。此の子は伊左
衛門が俥とは。先年死したる遺手の玉が話
にて。とつくより聞付け無念とも口惜しと
も心一つに堪たへ兼ねしが。いやく改めて
は侍の身分立たず。殊に此の子も。我々夫
婦を誠の父母と思ひ睦しく。不便さも増す
故に縁でかなと諦め。二世と連添ふ妻にも
深く包み。夕霧が生んだる某が實子と偽り
しかば。流石女房の優しくも夕霧が心を憐
み。乳母と名付け此の内へ呼び取りしは
皆此の俥が可愛さ故。それに何ぞやあさま
しい體にて忍び入り。親よ子よのと名乗り
あひ。知らぬ子に智慧つくる。ヤレ。幼く
ても此の子はな。馬に乗り槍つかせ生先立
身樂かたがひ身の。俥に恥を與へん爲か左近が武

士をすてんためか。色に迷ひ馬鹿つくし女どもが手前も恥かし。堀工、恨めしや是非もなや悴を返す連れ歸れ。町人の子に刀臨差無用なりと引寄せて。もぎ取る所へ奥方は走り出で。なう情なや此の子が事は我とても。直の話を聞きしかども調べてはお侍の一分廢ると思案して。貰ひ切つたる此の子なり今返しては武士が立たぬ。一寸も放さぬと抱き上ぐるを引放し。自身を立て名を立て。一分を立つるといふも子孫のため。眞實子を持たぬ此の左近誰が爲に身を惜まん。一分すてる合點と大小もぎ取り突出す。いや／＼たとへ此方は返しても。契約して子にしたからは此の雪が返さぬ。夕霧も戻さぬと取付くを引退け。縋り付くを引放し夫をもどく見苦しと。奥方引つ立て玄關をフシはたと。戸さして入りにけり。堀伊左衛門も夕霧も。スエテ前後にくれて途方なく。淵源之介泣き出しコレ父様母様。おりや駕籠昇の子ではないわいの。堀傾城の子には

なりともない父様の子ぢやわいの。母様の子ぢやわいの。こゝ明けてくれやい侍ども。あけをれやいと泣叫び玄關の戸をとん／＼と。鼓く楓のわくらはにフシ答ふるものもなかりける。堀夕霧息も絶え／＼ながらこれ源之介合點しや。眞實そなたは左近殿の子ではない。母こそは夕霧で、ごはそれ藤屋伊左衛門。さもしい人と思やるな江戸迄も知られて。左近殿より大身の武家に親類もあるぞいの。堀か、故の御浪人そなたも憂き目見せまじと。左近殿の子といひしが誠の親と假親の心はさしも違ふかや。左近殿も其方をよも憎うはあるまいが。我が身の無念一旦の腹立に。いとしい其方をフシ捨てらるゝ。あの父様や此の母は今の如く人中で。踏まれぬばかりに恥をかき。言ひ下けられても其方を抱くが嬉しい。逢ふが嬉しい肉身分けし本の子は。かうもいとしいものかこの母が此の氣色では。もう逢ふ事はなるまい父様の事頼むぞ

や。せめて一年しつとりと一つ寢臥しもしたいぞと。かき口説きしみ／＼とフシ眞實。つくす憂き涙。堀源之介閉分けて。此方が本のか、様か父様は此方か。傾城でも駕籠昇でも本の親がいとしいと。涙交りの笑ひ顔。フシ血の筋見えてあはれなり。ヲ、出来いた／＼侍とても貴からず。町人とても賤しからず貴い物は此の胸一つ。氣遣せまい伊左衛門が妻子。憂き目はさせぬ力落すな／＼と。言へども我も力なくスエテ只茫然と成りにけり。堀吉田屋喜左衛門駕籠昇願ひ是非なしともお笑止とも。参りかかつて我等の迷惑。堀外の事ならば何とぞ思案も致すべきが。申しても霧様は親方がかり。殊に病中大事のお身。堀先づ連れ歸つて扇屋へ手渡しせねばお爲にも如何。いざ召しませと昇き寄する。扱は再び別れて廓へ歸るかや。ハアウとばかりにかつばと伏し。既に息も絶えんとす伊左衛門抱き起し。吉田屋は印籠の。氣付さま／＼看病し

フシやうく性根つきけるが。昔より幾人かかうした身の愛き難儀。話にも聞きつれど是程の辛い事。重なれば重なるかや今逢うて今別る。あの子をせめて相籠駕でいざおじややとだき寄するを。引放しそれは喜左迄迷惑。これ世にも人にも恨なし。左近も言はゞ尤至極。女房が情といひ誰か親子三人に仇する者は無けれども。親に逆ひ財を費し身を奢りたる其の報ひ。あれあの天道に睨まれて何處にて身の立つべきぞ。百里來た道は百里歸る。昔の榮耀ほど愛き目を見ねば罪消えず。男故の苦勞と思ひ歸つてくれと泣き諫め。賺し乗すれば弱々と言ひ度い事の數々も。せき來る涙せき來る胸命の内に今一度。顔ばせ見せ度い逢ひ度い末期の水をあの子の手から。頼むくくと夕霧の名に立ちかはる夕霞見送り。見送る門々の。松に太夫が面影を残して。別れ三區へ歸りける。

下之卷

夕べあしたの。鐘の聲寂滅。爲樂と響けども聞いてナ。驚く人もなし引合手野邊より。あなたの。友としては血脈。一つに數珠一。連是が。冥途の友となる。物貰ひでも目かりを利かしや。是程醫者の出入やら神子の御符のと。屋内がもて返いて。七種囉す間もないが目に見えぬか。通ひやくと言ふ所へ梅庵御見舞四枚肩。下りるの衣長羽織。醫者は奥へぞ通ひける。伊左衛門編笠傾け小聲になり。やれ源之介。母が氣色が重さうな。命の内にも一度見せ度く此の姿にて來れども。最早見せる事も見る事も。成るまいと叫げば源之介。早う逢ひ度い事ぢやとてスエテ父に縋りて泣きゐたり。梅庵様お歸りと。表へ出づれば遺手杉家内の上下ついて出で。病氣はどうでござります。梅庵頭を振つて。着簾扇鶴でも叶はぬ。物に譬へて言はば乾上つた土器に。燈心一筋とほいて風吹きに置くやうな物。今日の日中か選うて初

夜限り。最早毒も何も構はず氣任せにしたがよい。ア、惜しい人ぢや。夕霧々々というて。親方にいかい金儲けてやつた女郎ぢや。達者な内に此の梅庵あの人を一年持てば。今頃は匙執らいでも樂するもの。あつたら金を彼の世へやる。是が本の來世金ぢやと。言ひすて歸れば扇屋一家は打萎れ。返答する者もなし。源之介醫者の言ひ分聞いたか。もう叶はぬ思ひきれ。ア、悲しやどうぞ母様の。死なしやれぬやうにして下されと。取付き歎くぞ不便なる。扇屋丁空夫婦。涙片手に蒲團手づからお上に敷き。今の相の山が奥へ聞えて。太夫の慰にはへ出て聞き度いとおしやる。是へ這入つて面白い事唄うて慰めて下され。あつと親子は笠傾け奥を見やれば夕霧は。芙蓉の背衰へて夕べ待つ間の玉の緒の。今ぞきれ行く息づかひ。遺手禿に手を引かれ。肩に。かゝりし其の姿。親子は目もくれ。胸塞がり洩るゝ涙を

夕霧も、それと見るより飛び立つ如く、心を胸に積み疊む蒲團の上にかつばと伏し、思ひを涙に通はせて、人目を中に憚りのッせせきたく、るこそ哀れなれ。

相の山早う、と言ひければ、あつと涙の玉簾、唄ふ聲にも血の涙、子は安方の囀り

や引

あひの山

一時の眺めとは知れども、迷ふッシかす

かすの。地文にそめても誠はうすく思ふ方

へとするがなる。富士も麓の戀の山我踏分

けて我迷ふ。夢の中戸のッシ夢枕。月を憎

みし夜半もあり。辛い座敷を貰はれて、餘所に、行く身を、彼の人に、ちよつと鹿

島の神も知れしんぞ嬉しき可愛さの、身にもこたへて忘れめや。初手二度迄は、

も二つの耳に、蜘蛛手に物思ふ格子叩くを相圖にて稀の

御見も羅越し、何を歎くぞ歎きても身は十年の繋ぎ舟。出舟の今日の名残の床明日の。舞太鼓の音迄も、寂滅爲樂とッシ響くなり。

舞太鼓の音迄も、寂滅爲樂とッシ響くなり。

舞太鼓の音迄も、寂滅爲樂とッシ響くなり。

舞太鼓の音迄も、寂滅爲樂とッシ響くなり。

舞太鼓の音迄も、寂滅爲樂とッシ響くなり。

舞太鼓の音迄も、寂滅爲樂とッシ響くなり。

舞太鼓の音迄も、寂滅爲樂とッシ響くなり。

舞太鼓の音迄も、寂滅爲樂とッシ響くなり。

舞太鼓の音迄も、寂滅爲樂とッシ響くなり。

舞太鼓の音迄も、寂滅爲樂とッシ響くなり。

方の。友とては橋、一枝一葉これが。冥途のハルッシ友となる。形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷は

形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷は

形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷は

形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷は

形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷は

形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷は

形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷は

形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷は

形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷は

形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷は

えぐくにこそなりにけれ。髪ヲ、髪飾りは假の戯れ。佛の三十二相とはあら木作り
の奉塔婆をいふ。只今某が切る髪は阿字の
一刀。彌陀の利剣を以て煩惱の羂絆と觀念
せよと。指添抜いて二人添寝の寝亂れ髪。
ふつつと切れれば源之助あつたら髪をと身に
添へて。フシ 悶え伏してぞ歎きける。四重
ねて櫓の水を携へこれ夕霧。人界は一生造
悪の娑婆世界。わけて遊君流れの身は。
面に紅粉を飾つて數多の人を迷はし。綾羅
錦繡を身に纏ひ多くの酒を酌み流し。煩惱
の種を植ゑて菩提の根を斷つとは遊女の
事。地此の水は極樂の八功德池の水と思
ひ。雨甘露法雨愍衆生故と聞く時は。是を
飲んで心身を霑し九品の淨利に往生し。半
蓮を分けて待つて居や。是其のしるしと同
じく髪を押し切つて。親子夫婦の手の水、
あはれにも亦頼もし。かゝる所に吉田
屋の喜左衛門。六尺に金箱持たせ。是は
平岡左近様の奥方お雪様の御使。夕霧を請

出す所其の筈違ひ是非もなし。されども代
金八百兩。其の爲の金子なれば外に使はん
やうなし。御病氣以ての外由此の金にて
請出し。一時なりとも廓の外にて。往生さ
せませとのお使なりと。いふ所へ。下袴の
若い者金箱數多肩けさせ。これく扇屋
殿。我等は藤屋伊左衛門様の御老母。藤屋
妙順様よりのお使。伊左衛門様は父御の御
勘當今は此の世に亡き人なれば。お袋様の
我が儘に勘當御免はなり難し。夕霧様には
御一子迄ある事嫁御係御に勘當はなし。藤
屋妙順が嫁を廓の内にて殺されず。一時な
りとも廓を出し。外にて往生させまし度い
とのお願ひ。金子二千兩持參致す。地サア
く片時も廓を出して下されと。競ひ勇め
ば扇屋了空。尤なれども金子を取つて隙を
遣るとは。行末の年月無事で勤める女郎の
事。今死ぬる夕霧に大分の金銀取つて。隙
をやるは此の扇屋は盗人と申す物。殊に全
盛して親方に。大分儲けてくれた此の太

夫。如命さへあらうならば。此の扇屋が身
代半分は入れます。此の金子夕霧其方に
やる。臨終に金やるとは異な事申すやうな
れど。此の金では萬部の經も讀まる。
跡の追善遺言めされサアく暇をやつた。
廓を連れてお出でなされと。切れ離れた
る行き方は流石所に往めばなり。今を限
りの夕霧につこと笑ひ。ア、どなたも
く有難いお志。お禮申して下されませこ
れ源之介。此の金は親方殿より下された。
其方にかゝが譲りちやゆゝしい町人にな
つて。父様の名を揚げてたも。わが身の出
世を草葉の蔭より見るならば。萬僧供養
にも勝りて。母は佛になるぞや。さりなが
ら。伊左衛門様源之介に妙順様を並べて。
三尊の來迎と拜み度うござんす。や妙順様
呼びに走れと立騒ぐ。いや呼びにやる迄も
なし。氣遣がつてアレ門口にと。手代伴ひ
入りければなう花嫁御珍しやく。嬉しい
對面誠の佛は西方のお迎ひ。此の妙順はこ

ちの家へ迎へ取り。金づくめにして養生し。や扇屋夕霧。憂へ却つて悦びを語り。傳へ此の姑が精力で本腹させて見せるぞと。て三十五年。又五十年又百年千年の秋の家内が勇む勢につれて諸病は氣より本腹夕霧を。なほ萬代の春の花見る人。袖をの。顔も生きくにくくと立つて踊るぞ連ねける。

右之本令吟覽頌句音節墨譜

等不殘毫厘令加筆候可有開

版者也

竹 本 筑 後 掾

(書印) 本竹

教博

重而予以著述之本令校合候

畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

正本屋 山本九兵衛版

山本九右衛門版

大阪高麗橋壹丁目

印